関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

明清時代北京の愛玩動物

その他のタイトル	The Pets in Peking in Ming and Quing Dynasties
著者	一ノ瀬 雄一
雑誌名	史泉
巻	85
ページ	33-49
発行年	1997-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00025356

明清時代北京の愛玩動物

一ノ瀬　雄一

一　はじめに

都市化が高度に展開をとげた明清時代において、都市に生活する人々の意識や嗜好は、当時の文化を見ていくとき、無視できない重要性をもつ。とりわけ首都北京は、政治の中心であるとともに、華北地方の経済中心の一つでもある。そこには権力と富が集中し、中国社会を象徴するような文化現象が見られるものと考えられる。

このような都市という居住空間の中で、人々がどのような生活環境を求めたのか、日々の暮らしの中で、いかなるものに喜びを見い出していったのかを考えるとき、植物や動物との関係を問題として設定することができる。換言すれば、花卉文化がいかに形成されたか、あるいは動物文化がいかに形成されたかということである。

明末清初期に中国を訪れたイエズス会士アルヴァーロ・セメードは、『チナ帝国誌』第一章、この国の概観の条で、花および動物に関して次のように述べている。

家柄のいいひとびとはだれでも中庭を設けており、そこに花や小さな樹木を植えており、北方ではそこに果樹をも栽培したりしているのである。そして、もし中庭が大変広ければ、ここに比較的大きな樹木を植えたり、人工の山を築くことさえもあり、この目的のためにわざわざ遠方から巨石を運ばせる。そこには鶴とか白鳥とか、その他の美しい姿をした鳥が放し飼いにされる。鹿とか羚羊とかいった野生動物が飼われていることもある。池もつくられていて、そこにはぴかぴかの鱗をもった赤や黒の魚が泳いでいるのが見られる。そのほかにもここにはこれらと同様に風趣に富んだ珍しいものが沢山ある。①

ここには、政治的・経済的な実力者が広い屋敷をもち、そこでさまざまな花を栽培し、あわせて各種の動物を飼育していたという風俗の一端を見ることができる。これに対して、

一般庶民がどのように花や動物とかかわり、文化を形成してきたのかというような観点からの研究は、管見の限りあまり存在せず、いまだ不明な点が多いものと思われる。[2]

そこで本稿では、貴族や富豪だけに限らず、一般の庶民をも含めた北京の人々が、明清時代において愛玩動物とどのような関係をつくっていったのか、動物に関していかなる文化をつくっていったのかを中心に述べていきたい。とくに日常生活に役立つ動物に対してではなく、愛玩動物に対しては、人々の趣味や嗜好がより多く見られ、都市生活の特徴が明確にあらわれるものと思われる。これらの問題意識により、以下に考察を進めていきたい。

二　北京の都市生活と花、動物

都市に生活する人々が、花や動物に親しみ手近に楽しむという状況は、北京だけでなく、中国の他の都市においても一般的に見られた。[3]

そして清・康熙年間、陳淏子の『花鏡』附録、養禽鳥法の条には、

多くの花を集めているのに、記載が鳥獣昆虫に及ぶのはなぜか。枝頭の好鳥や林下の文禽は、みな名園を鼓吹し、俗耳を戒めるのに十分である。ゆえに録するところの鳥獣は、その羽毛が豊美なものをとったのではなく、その音声が嬌好なものをとったのである。荒々しくて強く、よく鬪うのをとったのではなく、緑の波を遊泳するのをとったのである。[4]

とあり、園芸手引書に鳥類の飼育法を付する理由として、それが花の美しさを一層引き立たせるからだと述べている。

また、同書養獣畜法の条には

ここに取り上げたものは、みな人の飼養する獣で、そのうち二三を録して、園林に点綴するためである。[5]

とあり、養昆虫法の条には、

昆虫は非常に小さいものであって、どうして筆墨を煩わす必要があろうか。しかし、開花した花や木の葉の陰に、もし蝶が舞い、蜂が忙しく飛ぶことがないならば、どうしても趣きを生ずることが少ない。…もし蝉が夕陽に躁がしく鳴くことや、こおろぎが暁夜に鳴くことがなければ、園林は寂寞としてしまい、何によって秋興を催すことができるだろうか。[6]

とあるように、獣や昆虫においても、美しい花にふさわしい動物を取り上げる理由を述べている。同書には、実用的な動物は一切取り上げられず、美観にかなった動物のみが記載されているのであり、花卉栽培の盛行とともに、さまざまな動物が飼育の対象になったことが推測できる。

このような状況の中で、北京の人々の生活は、花や動物とともに、季節の移ろいの中で営まれた。明清時代においても、四季の折々に歳時記というべき行事がくりひろげられ、それが人々にうるおいを与えた。

その中でも、花と動物は重要な位置を占めており、明末に例を取れば、劉若愚の『酌中志』巻二十、飲食好尚紀略の条に、それを見い出すことができる。花や動物と季節とのかかわりについて述べた部分を抜き出せば、次のようになる。

二月、…この月には、菊や牡丹を分ける。およそ花木の穴蔵に収められているものは、隙間をあけて風を入れてやる。

三月、…天子が回龍観などのところにいらっしゃって、海棠を鑑賞される。穴蔵の中の花樹は、すべて園圃・台榭・庭のてすりなどの類いに出される。みなこの月は、身を修めつつしむ。富貴の家では、みな牡丹の花を鑑賞し、日除けを備える。

四月、…牡丹が盛りののちは、ただちに席を設け、芍薬の花を鑑賞するのである。

七月、…この月はひら魚を食べて盛会をなし、木犀の花を鑑賞して促織を闘わせる。よく闘うものは、一匹が十余両に値しうるが、まちまちである。それぞれ名称がついているが、賭博をして勝ちを求めるのである。

八月、宮中において秋海棠や玉簪の花を鑑賞する。…およそ内臣の多くは、花木を庭と家の中で好み、多くの盆を並べ設け、あわせて金魚をかめの中で飼育する。

九月、御前に菊花をささげて置く。

十月、…およそ普段、並べ愛でるところの石榴などの花樹を、すべて盆を連ねて穴蔵に入れる。

十二月、…この月は、煖洞にかおりぐさを進め、牡丹などの花を開かせる。

これらから、当時の宮中において、菊・牡丹・海棠・木犀・玉簪など、季節の中でさまざまな花が鑑賞されるとともに、促織（こおろぎ）や金魚が飼育され、歳時記の中で重要な位置を占めていたことが分かる。

そして花や動物の文化は、時代が下るにしたがって、広く一般庶民にまでゆきわたっていく。清末の『燕京歳時記』にそれを読み取ることができる。

初春正月から始まって、毎月七・八の日には内城内西部の護国寺で、九・十の日には内城内東部の隆福寺で、それぞれ縁日が開かれる。そこではさまざまな品物が売買されるが、その中でも雅びやかな商品が、花を中心とする植物であった。春の牡丹・海棠・丁香・碧桃や果実の樹木だけでなく、夏には茉莉、秋には木犀と菊、冬には水仙がすぐれ、季節を問わず、さまざまな花が人々の目を楽しませていた。[7] また内城東

南の崇文門外の東では、正月から毎月の四・十四・二十四の日に、造花の市である花児市が開かれ、そのほかに鳩が売買され、人々の人気をよんでいた。[8]

四月になると、玫瑰と芍薬の盛りとなり、その甘い香りが街中にただよい出す。花売りが呼び売りをしながら街を歩き、その声が人々の耳を楽しませる。[9]その四月の末には、黄鸝、すなわちうぐいすが柳の蔭の中でさえずり、新しい季節の訪れを告げるのである。[10]また五月には石榴の花が開き、夾竹桃の花と並べて中庭に置かれる。さらに二つの花の間に、金魚を入れた鉢を置き、それらを一つのまとまりとして多数の家々が鑑賞したという。[11]つづく六月朔日には、西南郊外、盧溝橋付近に位置する草橋の碧霞元君廟で市が開かれるが、その中でも中心となるのが花卉樹木であり、それを見るために多くの人々が集まるのである。[12]

七月に入ると金鐘児、すなわちすずむしが北京の街で販売されはじめ、その美しい音色が人々の耳を楽しませる。[13]九月九日の重陽の節句の頃には、菊の花が盛りとなり、富貴の家では菊花数百鉢を棚に置いて陳列し、さまざまな種類の菊の花を見て楽しんだという。[14]

十月には蛐蛐児、すなわちこおろぎがたくさん市場に出回ってその値も安くなり、きれいな音色を聞くために人々は買い求める。[15]また、この月以降には、梧桐（しめ）・交嘴（いすか）・祝頂紅（べにすずめ）・老西児・燕巧児などの禽鳥が飛来し、人々はこれらを買い求め、さまざまな技を仕込んで楽しんだ。[16]そして十二月には、本来花が咲く季節ではないのにかかわらず、温室栽培の花である唐花が出回り、人々は新年の贈答用として、牡丹などの花を買うのである。[17]

以上を見ると、花や動物はまさしく季節を表わす指標として人々に意識され、四季の移ろいの中で、なくてはならないものとしてとらえられていたことが分かる。

そして動物に関しては、次節で述べるように、昆虫類・金魚・鳥類・猫・犬などのさまざまな動物が愛玩用として人々に飼育され、花の文化に勝るとも劣らない動物の文化が形成されたのである。

三　愛玩動物

（一）昆虫類

まず虫では、促織すなわちこおろぎが、北京の人々に愛玩された。その事情は、明末の劉侗・于奕正の『帝京景物略』巻三、胡家村の条に詳しく述べられている。

いま都の人々は人工孵化ができ、その鳴くのを晩冬までのばせる。その方法は盆に土を盛り、その上に虫を養い、卵を土の中に生ませる。冬に入ってからその土を暖かい

炕の上に置き、日ごとに水をそそいで綿でこれを覆う。孵化して五・六日すれば、土の上面が蠕動する。さらに孵化して七・八日、蛆のような白いものが生ずる。そこで子を蔬菜の葉の上に置き、あるいは水をそそぎあるいは覆う。足や翅ができて、次第に黒くなり、ひと月すると鳴きだす。その音色は秋のものよりも繊細である。春に入ると、逆にたおれる。

とあり、人工孵化という方法をつかって、冬にこおろぎを鳴かせていたのである。同書同条に

促織は秋の気配に感じて生まれ、その音色は商の韻で、その性質は勝ち気である。秋がおわれば死んでしまう。

とあるように、季節的にはこおろぎは秋の虫であった。しかし、人工的な手立てをほどこすことにより、季節をずらせて音色を楽しんでいたのである。

そして同書同条に、

永定門外五里に、いねやきびが巍巍然として野をおおっているのは、胡家村である。…［そこには］促織を産する。促織は誇って鳴き、善く闘う。殊によそで産するものより勝れている。

とあり、美しい音色に加え、こおろぎ同士の闘いに強いものが珍重され、その産地が北京郊外東南部の胡家村であった。胡家村におけるこおろぎ飼育は、清・乾隆年間の『欽定日下旧聞考』巻百五十一に、

胡家村は、永定門外よりも東にあり、今なお促織を産する。

とあるように、清代中頃においても盛んであった。

こおろぎを闘わすという風俗については、『帝京景物略』巻三、胡家村の条に、

およそ、都の人々の闘促織という習俗は、ただに街中の小児だけのものではない。遊び人の貴族が、暇に任せてこのことにのめりこみ、豪族がその財産を使い果たし、士人がその業を駄目にしてしまった。今はまた、ようやく［闘促織も］衰えて止めになった。ただ嬌姹の児女だけは、闘わせることによろこびを見い出し、いまだにやめようとしない。

とあり、闘促織の魅力にとりつかれ、身分・財産・生活を失ってしまった者が、多数いたのである。

このこおろぎには、色や形の違いにより、上下の等級があり、それは同書同条に次のようにある。

およそ促織は、青色のものを上とし、黄色がこれに次ぎ、赤色がこれに次ぎ、また黒色がつづき、白色のものが最も下である。（紅麻頭、白麻頭、青項金翅、金絲額、銀絲額と呼ばれるものが上である。黄麻頭がこれに次ぎ、紫金、黒色がまたこれに次ぐ。）これらは色で分類した

場合である。首や項が肥えており、腿や脛が長く、背身が闊いものが上である。それほどでないものがこれに次ぎ、まったく条件に反するものが下である。（それらは油利撻、蟹殻青、棗核形、土蜂形、金琵琶、紅沙、青沙、紺色と呼ばれ、同じともがらである。長翼、梅花翅、土狗形、蟷螂形、飛鈴と呼ばれるものも同じともがらである。皂鶏、胡蝶形、香獅子も同じともがらである。）これらは形で分類した場合である。

ここには、飼育の大衆化にともない、形や色のわずかな違いを強調し、希少種の所有を人に誇るという態度につながるものがある。

こおろぎの闘技場の様子については、清末の夏仁虎の『旧京瑣記』巻一、俗尚の条に次のようにある。

蟋蟀を闘わせる場は、多くは順治門外にあった。虫を飼育する者は、またこれを把式といい、水を飲ませて調え養う。各々師の伝えがあり、報酬を受けることはなはだ豊かである。虫を養うための器には、一枚が百十金に値するようなものがあり、趙子玉が作ったものを最良とする。おそらく乾隆か嘉慶時代の人であろう。開場すれば、すなわち紅色の絹布を門に懸け、車馬はみな集まり、上流人士はしばしば参加する。勝負は巨額を数え、一つ鳴けば人を驚かせ、祝ってくれる者がこもごも集まってくる。

つまり闘技場の所在地は内城西南の順治門外、すなわち宣武門を外に出たところにあり、蟋蟀すなわちこおろぎを飼育する者は把式と呼ばれていた。闘技に勝利した者の報酬は莫大なものであり、闘技場は華やかにしつらえられ、賭けに多数の者が参加し、賑やかに勝負が行なわれていた。『帝京景物略』には、闘促織が明末に衰退したと書かれていたが、実はその後も清末にいたるまで盛んに行なわれていたのであり、その賭博性が人々を魅了したのであろう。

また、飼育の対象になった虫は、こおろぎだけでなかった。『燕京歳時記』七月、金鐘児（すずむし）の条には、

金鐘児は「河北の」易州に産する。形は促織のようである。七月の季、京師に運ばれてきて販売される。枕べでこの虫の音を聞くと最も清越な感じがする。余韻があってしかも悲しみの心を生じない。彼はあたかも大厦高堂の「愛玩の物」となるために生まれたもののようである。されば「黄金の鐘」というよび名もみだりにつけられたものではない。[18]

とあり、易州産のすずむしが北京において飼育され、その音色が人々の耳を楽しませていたのである。さらに同書十月、蛐蛐児（こおろぎ）・聒聒児（くつわむし）・油壺盧（えんまこおろぎ）の条には、次のようにある。

虫や鳥の鳴くのは最も時候と関係がある。しかも人工的力のおよぶところもまた、よく時節とともに転移する。[したがって]これもまた時候に関係があるものである。

京師では五月以後には聒聒児（くつわむし）が出て、街路に沿うて呼び売りされる。その価は毎匹一、二文に過ぎない。十月になれば燃熅によるものが生まれる。その価は毎匹数千文である。七月中旬にはすなわち蛐蛐児（こおろぎ）が出る。高価のものは数両もする。白麻頭、黄麻頭、蟹胲青、琵琶翅、梅花翅、竹節鬚などの区別がある。[価の高いのは]よく戦闘をするからである。十月に至ると一匹が数百文に過ぎないようになる。それはただ鳴音を買うのみだからである。蛐蛐児の類にまた油壺盧がある。[初]秋にあたっては一文で十余匹を買うことができるが、十月になると一匹の値が数千文もする。思うにその鳴くときは鏗鏘たる音を断続し、声は顫えて長い。冬夜これを聴けば悲しかったり、うれしくなったりする。真に有閑人の風流韻事である。だから秋日に蛐蛐児を入れるかんには永楽官窰、趙子玉、淡園主人、静軒主人、紅澄漿、白澄漿などの種類がある。佳いものは一対で数百両もする。冬月の聒聒児を入れる壺盧や油壺盧を入れるそれも、また佳いものは一対数百両する。壺盧は紫のつやがあって堅厚なものをもって上品とする。

此中國賣蝸蝸之圖也中國冬夏俱有蝸蝸冬月有三種黑紫色者名為山蝸蝸乃中旬陽處生者青色是嫩的綠色者難得乃係用蝸蝸子在暖處養成人力為之其價甚昂也

図1　『北京民間風俗百図』書目文献出版社　1983年

すなわちいわゆる壷盧器と称しているものがこれである。だから京師の世襲の貴族（満人出身の貴族）も貧なるものが多数にある。財産をむだづかいする道は、じつに音声女色珠玉のみに止まるものではないのである。[19]

こおろぎと同様に、すずむし・くつわむし・えんまこおろぎの音色が人を楽しませ、これらの虫を買い求め、飼育する器に凝って多額の出費をするため、散財する者も多数いたのである。

なお、虫を販売する業者の姿は、図1に見えるとおりである。これには、くつわむしを売る業者が客とともに描かれており、二人ともひょうたん型の壷盧器を手に持ちながら、何かやりとりをしているようである。清末の風俗の一端をうかがわせるひとこまである。

（二）金魚

宋代に始まる金魚の飼育は、時代が下るに従って広く普及するようになるが、明清時代の北京も例外ではない。明末の『帝京景物略』巻三、金魚池の条には、

池の水は清く、住民はこれを区切って小さな池をつくっている。柳の木が枝を垂れて、これを覆っている。［住民は］毎年金魚を育てて、これを職業としている。金魚の種類については、深赤色のものを金といい、瑩白色のものを銀といい、白地に黒い模様や、赤地に黄色い模様のものは璃瑁という。その魚が金であれば、銀の帯が周りをめぐっているものを貴び、その魚が銀であれば、金の帯が周りをめぐっているものを貴ぶ。これらを管と箍とに分けて区別している。管とは、小びれの下から尻尾の上までの部分に帯がめぐっているものをいう。箍とは、小びれに及ばずに、その尻尾の部分に帯がめぐっているものをいう。金魚には、異種なるものがある（体が白くて、その額が朱色のものを鶴珠という。体が朱色で、その背中が白いものを銀鞍という。背中が朱色で、白い点が七つあるものを七星という。背中が白く、朱色で八が書いてあるものを八卦という）。蝦種なるものがある（銀目、金目、双環、四尾の属）。

とあり、金魚飼育業が金魚池でなされていたこと、その種類は色や模様や形などにより細分化され、それにともなって数多くの名目がつけられていたことが分かる。

北京の金魚が、その色彩の豊かさで有名であったことは、清代に入っても同じであった。康熙時代の人、王士禎の『香祖筆記』巻七に、

近ごろ、都の金魚の色彩は種々に変化し、最もあでやかですぐれている。白魚で朱色の点があるものでは、あるいは首にあり、あるいは背にあり、あるいは尾にある。

これを小さい池の中に置けば、遊泳しながら水面で呼吸し、美しいこと錦綺のようである。生物の底知れない部分を明らかにしている。聞けばまた、藍色の魚もあるとのことだが、残念ながらまだ見ていない。

とあり、その美しさの点で、抜きん出ていた。また金魚池における金魚飼育も、同様につづけられた。それは『清稗類鈔』稗四、名勝類、金魚池の条に、次のように見られる。

都の崇文門外の南、小市街東端にある金魚池は、本当の名を魚藻池という。『葩経』[『詩経』]の王在の義をとっている。四角い堤防と小さい池が、縦横に田のあぜのようにつづく。住民はみな、魚の飼育を職業としている。

同様の記録は、道光十二年（一八三二年）から翌年にかけて北京を訪れた朝鮮使節の一人、金景善の『燕轅直指』巻四、金魚池記にも見える。

明因寺の東南一里ばかりに金魚池がある。あるいは魚藻池とも称する。池には五色の魚を産するが、金色のものが最も多い。ゆえに［金魚池と］名づける。正陽門外の魚屋で売られるものの多くは、この池より出ている。体長の小さなものは、豪富家が魚缸で蓄えている。[20]

とあるように、当時は体長の小さな品種が豪富家に珍重されていた。

さらに、『清稗類鈔』稗十三、朝貢類、某大臣貢傻白金魚の条に、

孝欽后［西太后］は金魚を飼うことが好きであった。傻白の金魚がいたが、［それは］某大臣が進上したものであった。孝欽后は毎朝早く行っては、［金魚を］見るのであった。宦官が掌でその甕の蓋をたたき、「傻白や、老仏爺様がいらっしゃって、お前をご覧になっているよ。」というと、すぐにせびれを動かして目を覚まし、ついばむ音を立てる。でなければ、水草の間に潜み隠れ、窺い見ることができない。宮人はこの目をもって、霊物としている。

とあり、清末の宮廷における金魚飼育の様子を述べている。西太后が金魚飼育を好み、よく馴れた金魚を飼っていたことが分かる。

季節との関連では、五月になると、北京の人々は金魚を買い求め、その泳ぐ姿を楽しんだ。『燕京歳時記』五月、石榴・夾竹桃の条に、

京師では五月に石榴の花がちょうど開く。鮮明なること眼を照らすばかりである。おおよそ居住者らはつねに夾竹桃といっしょに中庭にならべて鑑賞する。石榴と夾竹桃の間には必ず魚缸を配置し、金魚数匹がそのなかを遊泳する。ほとんどの家々がみなそうである。[21]

とあり、石榴と夾竹桃の花の間に金魚鉢をおいて鑑賞した。

ここには花と動物とを組み合わせて楽しむ文化が見られる。

さらに、

だから京師の諺に「天篷と魚缸と石榴樹」というが、思うに［各家が］みな同じことをするのを譏したものである。[22]

とあるように、金魚の飼育はどの家でも見られ、非常に広く普及していたことが分かる。

（三）小鳥

小鳥の飼育も、北京の人々の間に広く普及していた。道光年間の様子を述べる『赴燕日記』、主見諸事、禽畜の条に、

かの人［中国人］の風習としては、最も声色を貴ぶ。家々の軒端には、みな鳥籠がかかっており、格別珍しい鳥を愛玩用として飼わない家はない。[23]

とあるように、多くの家の軒先には鳥籠が吊され、小鳥が飼育されていた。それが売買される場所は、同書同条に、

百舌鳥なる者は、…売り買いされる。隆福寺には鳥獣の市がある。[24]

とあるように、隆福寺の縁日に立つ鳥獣市であった。

また、この隆福寺の近くには、常設店舗としての小鳥屋があった。金景善の『燕轅直指』巻三、彩鳥舗記に、

花草舗より転じて彩鳥舗に向かう。そこはすなわち色々な彩鳥を飼育し、需要に応じて売る所である。[25]

とあるのがそれである。つづけて、

店内の周囲には、鉄線でできた小さな籠がかけてある。籠にはそれぞれ一羽の鳥、あるいは雌雄の二羽がいる。[26]

とあって、店内には沢山の鳥籠が吊され、一羽もしくはつがいの二羽が入れられていた。次に、

鳥はみな、羽根を美しく彩っており、まばゆく輝く様子は、絵の中のようである。見たところ、あるいはまた我が国にいる鳥かもしれないが、名前を知らないものも多い。籠の中には、いずれも小さな皿か銅器か瀬戸物を置いて、水を貯えており、また粟の穂をかけている。おそらくそれ［鳥］が飲み啄むためであろう。[27]

とあって、色鮮やかな鳥が入れられた籠の中には、飲み水を入れるための器と、啄むための粟の穂が置かれていた。ただし、すべての鳥が籠に入れられていたわけではない。つづけて、

ただ鸚鵡だけは籠に入れない。條座の鉄の網は、白銅の大きな輪で貫かれており、両方の端にかかっている。また、連なった輪の細い鉄線の一方はその足につなげ、もう一方は鉄の網につなげてある。左右にそれぞれ小さな銅製の皿を置き、一つには水、一つには粟［が入れてあ

る」[28]。

とあって、鸚鵡だけは籠に入れず、鉄棒につないで客に見せていたのである。

（四）鳩

北京の人々は、鳥の中でも特に鳩の飼育を好んだ。王士禎の『居易録』巻二に、

都の花児市で、黄色い鳩二羽を売っていた。羽毛が黄金色で、値段を聞いてみると、はなはだ高かった云々。

とあることから、鳩市が清初以来あったことが分かる。そしてその存在は、清末においても確認できる。『燕京歳時記』正月、花児市の条に、

花児市（フワルシチョウ）は崇文門（チョウウェンメン）の外から東にある。…花の市の外には（よこまち）また鳩市（はといち）がある。それは市肆の北の小巷内にあるのである。[29]

とあり、また同書正月、土地廟の条には、

土地廟（トウディミャオ）は宣武門（シュアンウメン）外の土地廟斜街の路の西側にある。…市は高価な品物はないが、ただ花屋と鳩市（はといち）とはやや見るべきものである。[30]

とあって、鳩市が崇文門外や宣武門外にあった。

これらの市で買い求められた鳩は、

鳩や鴿は、また食料となる。家々にこれを養っている。[31]

とあるように（『赴燕日記』主見諸事、禽畜の条）、食用にされることもあったが、一般的には愛玩用であった。そして、今世紀初頭に北京を訪れた船津輸助の『燕京佳信』第八信（明治三十五年［光緒二十八年、一九〇二年］十月十二日）に、

北京の豪家鴿を養ひ其足に竹にて作りし小笛をしばり、朝早くより天気よき時は空中に放つ。数十羽群を為し其笛空気に触れヒューヒューと朗なる声を為す。中々おもしろきものに候。朝、目がさめし時耳に入るはまづ此の鴿笛と駱駝のリン（鈴）に候。[32]

とあるように、朝に沢山の鳩が外に放たれ、足につけられた鳩笛の音が、北京の街に響きわたっていた。このように、鳩の飼育が盛んとなるにともない、実に多品種の鳩が飼育されるようになった。『燕京歳時記』正月、花児市の条に、

けだし京師では好んで鳩を飼うことが多いので、鳩の種類はきわめて多い。その普通のものには点子、玉翅（し）、鳳頭白、両頭烏（う）、小灰皂（そう）児、紫醤、雪花、銀尾子、四塊玉、喜鵲花（じゃく）、跟（けん）頭、花脖（はく）子（そう）、道士帽、倒挿（そう）児、などの名目があり、その珍貴なものには短嘴（し）鷺、鶯（し）白、烏牛、鉄牛、青毛鶴、秀蟾（せん）眼、灰七星、鳧（ふ）背、銅背、麻背、銀楞（りょう）、麒（き）

麟斑、躑雲盤、藍盤、鸚嘴白、鸚嘴点子、紫烏、紫点子、紫玉翅、烏頭、鉄翅、玉環などの名目がある。[33]

とあり、全体および各部分の色や模様の違いによって、非常に細かい分類をし、それぞれに名前をつけて飼育を楽しんでいたのである。

このような鳩を中心とする鳥類の飼育を描いたのが、図2である。鳥籠を持った数人が、大空に鳩などの鳥を放ち、お互いに話をしながら集まっている。鳥を仲立ちとして、人々の交流がはかられ、趣味を同じくする集団が形成される様子をあらわしている。

（五）猫および犬

猫や犬も、明清時代の北京で盛んに飼われていた。明の宮廷においても猫や犬を愛玩し、飼育していたが、その趣味は少し変わっていた。明・沈徳符の『万暦野獲編』補遺巻一、内廷豢畜の条には、

また猫の性質として、最も跳驀を喜ぶ。宮中で、天子の世継ぎが初めて生まれ、まだ大きくないとき、［猫と］ひそかに逢って争い、お互いに誘いあって吠えられるという目にあう。往々にして、驚いてひきつけをおこし、病気となってしまう。…また、かつて宦官の家で飼われる去勢猫を見たが、その高くて大きいものは尋常の犬を越えている。そして犬はまた、小さい種類を貴ぶ。その最も小さいものは、波斯金線の属のようであり、かえって猫の数倍も小さい。つねに包み入れ、袖の中に置き、呼んでやるとすぐに自分から出てくる。よく人の思いにしたがう。声ははなはだ雄々しく、殷々として豹のようである。

とあって、宮廷で飼われる猫や犬について述べている。すなわち、よく跳びはねるために、幼い皇太子を驚かせて病気にしてしまう猫、普通の飼い犬よりも体長が大きい去勢猫、その逆に、袖の中に入るほどで、猫よりも小さな犬といった動物が、宮廷内で人気を博していた。同様の趣味は、次のように明・謝肇淛の『五雑組』巻九にも見られる。

都の内寺や貴戚では、猫を蓄えている。それは白くて、丸々と太り、数十斤をこえている。鼠を捕らえず、ただ人に馴れ親しいだけである。犬を蓄えればすなわち、金色の毛で足が短いものをもとめる。地面でよろめき、おそらく猫を兄としてつかえている。盗っ人にも吠えない。これもまた、物の常に反して妖しい者である。

鼠を捕らえられないほど丸々と太った猫や、金色の毛で足が短く、盗っ人を見ても吠えない犬が、好んで飼われていた。このような動物は、実用的には全く意味がなく、ただ愛玩の目的でのみ飼育されていたのである。

図2　青木正児編・内田道夫解説『北京風俗図譜2』平凡社東洋文庫　1964年

さらに清代においても、同じ傾向がつづいた。ある朝鮮使節が著した、嘉慶年間の『薊山紀程』巻五、畜物の条には、

犬にはあるいは大きなものがいるが、それは駒のようである。そのはなはだ小さいものは、猫のように人の炕上にとどまり、女人はあるいは懐の中に抱く。東人は名づけて勃々という。また別に豪博の種があるが、性格ははなはだ獰悍である。ゆえに鉄の鎖でそのうなじをつなぎ、そのうえ木椎の両端を貫いて、あごの下に垂らし、これを制御している。しかし初対面の客を見ると、たちまち跳び出てみだりに吠え、必ず齧ろうとする。[34]

とある。小馬のように大きな犬、猫のように小さな犬、大変獰猛で人にかみつこうとする犬の三例を、代表として上げている。これらのうち、大きな犬と獰猛な犬は、同一のものを指すようである。『燕轅直指』巻六には、

犬には多くの種がある。鄂羅館で飼っているのは、はなはだ大きなものである。聞けば、人をかむこと虎のごときである。おそらく、いにしえの旅獒の類であろう。その蒙古より出るものは、また荒々しくて強く、御しがたい。鉄の鎖でその首を繋ぎ、門を守らせるだけである。[35]

とあって、鄂羅館（訪清ロシア人が滞在するロシア館）で飼育されている犬は、体長が大きくかつ獰猛で、鉄鎖でつないでおかないと、すぐ人にかみつくような性格で、番犬として

使われていたようである。そして実用的な番犬であっても、それを飼い主がかわいがるという前提が存在するのであり、これも広い意味での愛玩動物に含めて考えることができる。

猫に関しては、『赴燕日記』主見諸事の条に、

猫には、黒色・白色・黄色・まだら色と、多くの色がある。家々にこれを養うが、いまだ特別異なった種類のものはいない。[36]

とある。あるいは『燕轅直指』巻六には、

猫は我が国［朝鮮国］のようであるが、往々異なる種がいる。毛が厚く、狐狢の蒼褐色のごときものもあり、これを撫でてかわいがっても、人を恐れない。[37]

とあることから、さまざまな色の猫がおり、多くの家で飼われ、人になついていたことが分かる。

特に、大きい猫と小さい犬は、乾隆時代にはすでに、北京の特産品として認識されていた。『欽定日下旧聞考』巻百五十、物産に引く『燕京賦注』に、

波斯猫の極めて大なるもの、拂菻狗の極めて小さきものは、いま都の土産となっている。

とあるごとくであり、それはペルシア猫とチンであった。

四　むすび

以上、明清時代の北京における愛玩動物について述べてきたが、人々は動物の形・色・模様などにより、非常に細かく分類し、たくさんの品種を作り出すという気質を持っていた。その典型は、こおろぎ・金魚・鳩などに見られるのであり、飼い主が少しの相違にこだわって珍種の所有を競った。そうなる前提として、それらの動物の飼育が一般化・大衆化していたことが指摘できるのであり、それゆえ他人とは違った珍種を求めたのである。

また、都市において飼育するという関係上、動物のおかれた環境もその影響を強く受けた。『五雑組』巻二には

都の住宅はすでに狭くて余地がない。市上にもまた糞穢が多く、都および四方の人が沢山いりまじって住んでいる。また蝿や蚋が多く、炎暑がめぐってくるごとに、いくばくも安心して暮らすことができない。やや霖雨がつづけば、たちまち水浸しになる心配がある。ゆえに伝染病や流行病はともになお絶えない。養生する者はただ静かに座し、時を選んで外出している。

とあって、明末の北京において、人々の住居はきわめて狭く、衛生的にも劣悪で、困難な住環境の中におかれていた。それは清代においても同様の状況であったと思われる。自然と隔絶され、かつ不衛生な住環境の中で、生活にうるおいを与えるものとして人々が手近に入手できたのが動物であった。し

かし、生活空間は限られており、広い庭を所有できない庶民にとって、比較的容易に飼育できたのは小型動物であった。それが虫・金魚・鳥・猫・犬であった。そして当然ではあるが、虫は陶器や籠で、金魚は鉢で、鳥は鳥籠で飼われ、動物のおかれた環境は、極めて人工的なものになっていった。さらに、環境だけでなく、動物自身も人工的なもの、あるいは自然にはありえない姿に変えられていった。愛玩用のため、実用的に全く意味のない犬や猫を作り出し、珍重するという態度がその具体例である。

それとともに、動物を飼育する人間も、その性格を変えていった。『旧京瑣記』巻一に、

貴家の子弟は、馬を馳せて弓矢を試み、鷹を調えて犬を放ち、尚武の気風を失っていない。しかし、養魚・闘蟀・走票・糾賭に至っては、気風は劣っている。別に、盛り場の遊び仲間がおり、籠をひっさげて鳥をとりことしたり、石や弾を投げうったりすることを日課としている。鳥には紅殿壳・藍殿壳・鵠鶻の類があり、調護珍惜している。[人々は彼らを]鳥奴と呼んでいる。

とあり、満洲貴族が中国化し都市化するのにともない、風俗が惰弱に流れていくことを嘆いている。その憂うべき例として上げられているのが、金魚・こおろぎ・小鳥の飼育である。もちろん漢民族も、日常的に愛玩動物に親しんでいたのであり、民族の違いを問わず、動物の飼育が盛んであった当時の北京の風俗をよくあらわしている。

さらに北京の人々は、動物と植物とを組み合わせることによって、両者のもつ美しさが倍加されると考えた。例えば金魚と石榴・夾竹桃とを並べて鑑賞するという場合があり、また次のように、鳥と花という組み合わせもあった。清末の人、震鈞の『天咫偶聞』巻九に、

城外西郊の花見については、近来、馮園をもって盛んとしている。園は広寧門外の小さな丘にあり、春の牡丹や芍薬、秋の菊を最上としている。城中の士夫は、くつわを連ね車を接し、往く者はむらがり集まる。園の主人は、思うに花に隠れた者である。園中にはまた、珍しい鳥獣数頭が飼われている。錦鶏・孔雀・翠鳥の属が花の間を飛び舞っており、まことにすぐれた風情にかなっている。

とあるように、牡丹・芍薬・菊などの花だけでなく、錦鶏・孔雀・翠鳥などの珍しい鳥が飼育されることにより、一風変わった趣がかもし出されていたという。そこには、自然の中で、鳥と花とを楽しむという態度が見られる。

これらの事例から、明清時代の北京には、愛玩動物に関する文化が高い成熟度で成立しており、それが広い範囲に普及し、多くの人々がそれを創造するとともに、享受していたことが分かる。

注

① 矢沢利彦訳『チナ帝国誌』（大航海時代叢書第Ⅱ期9『中国キリスト教布教史2』、岩波書店、一九八三年）第一章、この国の概観の条、二六八頁。

② 花に関しては、拙稿「明清時代北京の花卉文化」（『史泉』第八一号、一九九五年）がある。動物に関しては、管見の限りまとまった研究は見られず、次のような素描的報告があるのみである。劉少博「老北京人養鳥和鬪蟋蟀的嗜好」（『燕都』一九八五年第三期）、翁偶虹「養鳥　老北京人的生活芸術之一　上・中・下」（同、一九八七年第一・二・三期）、同「消夏拾趣　老北京人的生活芸術之二」（同、一九八七年第四期）、同「冬日話秋虫　老北京人生活芸術之三」（同、一九八七年第六期）、石志廉「北京金魚業」（同、一九八八年第五期）。

③ たとえば蘇州・杭州・南京の都市生活について、顧禄『清嘉録』、田汝成『西湖游覧志余』、潘宗鼎『金陵歳時記』などに、花卉文化・動物文化を示す史料が散見する。

④ 陳淏子輯、伊欽恒校注『花鏡』（農業出版社、北京、一九六二年）、四〇三頁。

⑤ 同書、四二五頁。

⑥ 同書、四三八頁。

⑦ 敦崇、小野勝年訳『燕京歳時記』（平凡社東洋文庫、一九六七年）、五〇頁。

⑧ 同書、五六頁。

⑨ 同書、一〇一～一〇二頁。

⑩ 同書、九九～一〇〇頁。

⑪ 同書、一二三頁。

⑫ 同書、一三五頁。

⑬ 同書、一五二頁。

⑭ 同書、一七七～一七八頁。

⑮ 同書、一九六頁。

⑯ 同書、二〇三～二〇四頁。

⑰ 同書、二三四～二三五頁。

⑱ 同書、一五二頁。

⑲ 同書、一九六頁。

⑳ 『燕轅直指』（民族文化推進会『燕行録選集』第十輯、ソウル、一九七七年）巻四、金魚池記、一三五頁。

㉑ 注⑦前掲書、一二三頁。

㉒ 同書、同頁。

㉓ 『赴燕日記』（民族文化推進会『燕行録選集』第九輯、ソウル、一九七七年）主見諸事、禽畜の条、一三七頁。

㉔ 同書、同頁。

㉕ 注⑳前掲書、一一六頁。

㉖ 同書、同頁。

㉗ 同書、同頁。

㉘ 同書、同頁。

㉙ 注⑦前掲書、五六頁。
㉚ 同書、五五頁。
㉛ 注㉓前掲書、一三七頁。
㉜ 船津喜助編、小川博注『燕京佳信、船津輸助の北京通信、明治三十五年～三十六年』（船津喜助、一九七八年）、四三頁。
㉝ 注⑦前掲書、五六頁。
㉞ 『薊山紀程』（民族文化推進会『燕行録選集』第八輯、ソウル、一九七六年）巻五、畜物の条、一四八頁。
㉟ 『燕轅直指』（民族文化推進会『燕行録選集』第十一輯、ソウル、一九七七年）巻六、留館別録、禽獣の条、八六頁。
㊱ 注㉓前掲書、一三七頁。
㊲ 注㉟前掲書、八六頁。

（大阪府立狭山高等学校教諭　関西大学非常勤講師
[redacted]）